

笑顔を咲かせよう♪

# ちゅーりっぷ 通信

平成29年

9  
月号

いきいき暮らす、  
あの人に会いたい  
第25回

酒場詩人

よし

だ

るい

## 吉田 類さん

1949年(昭和24年)高知県生まれ。仏教美術に傾倒し、シュールアートの画家としてパリを拠点に約10年間活動。90年代から酒場や旅をテーマに執筆をはじめ。主な著書に「酒場詩人の流儀」(中公新書)、「酒場歳時記」(NHK出版・生活人新書)、「酒場詩人・吉田類の旅と酒場俳句」(KADOKAWA)など多数。俳句愛好会を主宰し、BS-TBSの人気番組「吉田類の酒場放浪記」は放送開始から今秋で15年目を迎える。NHK「ラジオ深夜便」でも「ないとガイド」で『酒で綴るにっぽんの旅』を担当(毎月第2日曜日、23時台)。高知県観光特使、仁淀川町観光特使。

北海道・札幌パークホテルにて

吉田類というお名前は響きもよく、なにやらいわれもありそうですが、どなたがおつけになったのですか。

これは母親なんです。ぼくは子どもの頃から放浪癖がありまして、家を出るとなかなか帰ってこないという子どもだったんです。それを母親がずいぶん心配しましてね。ぼくの名前の字画を調べたら、非常に良くないと(笑)。それで名前を改名したら放浪癖もおさまるかもしれないということ、亡くなった父親と同じ文字で画数のいい「類」という名前に変えたんです。最初は「たぐい」と読ませていたんですが、誰もそうは読まず「るい」と呼ばれ、それが本名のようになっていました。この類という名は画数でいうと、放浪癖はおさまり、安定した家庭を築き、子孫繁栄のはずだったんですがね(笑)。

ぼくは高知県の山奥、ちよつと四国山脈の真ん中あたりで生まれたんですが、子どもの頃、その山を越えてあちこち冒険していたわけです。地図も食べ物もなにも持たず、近所の子どもを引き連れて山を越えていくものですから、真っ暗になって戻ると村中が大騒ぎになっていたということもありました。父親をはやく亡くしたので、ファザゴンの傾向があって父親の面影を求めて彷徨するということになったことがあったのかも知れませんが、父のことはほとんど憶えていませんが、山高帽をかぶり、鞆を提げて山道を



帰ってくる姿とその父をちよこちよこ迎えに行ったことだけは記憶にあります。だから、その冒険というか放浪というか、それはどこか父の姿を求めていることだったのかなとも思っています。

で、歩き続けて山を越えていたとき、山奥にいるはずなのに、海をちらっと見たことがありましてね。遠くに土佐湾が小さく光ってキラキラしていたんです。それまで海を見たことがなかったので、あれが海なんだ、あれを越えて行ったら別の世界があるんだと強烈に思いました。

**それが後の渡欧につながるんですね。アメリカではなくヨーロッパに渡られたのはどうしてですか。**

絵画ですからアメリカのニューヨークという選択肢もたしかにあったんですが、仏教美術をやっていたので宗教画の伝統もあるヨーロッパにしました。パリを拠点にしてヨーロッパ各地で絵を描いて、画家に会ったり、展覧会に出したりしていました。ぼくが影響を受けたシュールアートにはウィーン派というのがありましてね。そのこともあってヨーロッパを選んだわけです。ただウィーン派の当時の中心的な画家たちは、入れ違いのようにニューヨークへ行っていました。直接学ぶことはできませんでした。しよががないので好きな画家のいる街の美術館に行つて勉強するという感じでしたね。パリにしているとイギリスやスペインというのが日常的に行ける感覚でしたから絵を学ぶにはいい環境でした。

**いわば自然児であった吉田類さんが、帰国されて再び自然に戻るきっかけというのはなんだったのですか。**

溪流釣りです。帰国してから東京に住みはじめて、編集者仲間誘われて釣りをはじめたんです。ところが妙なことにぼくだけよく釣れるんですよ。ほかの人が釣果ゼロでも、必ずぼくだけが釣れる。どうしてかなと思つたら、ぼくは仁淀川の上流でいつも魚と泳いでいたからなんですね。魚の習性や動き方とかが全部わかっていたんです。「野生の思考」という哲学が昔ありましたけど、そうじゃなくてぼくの場合、野生そのものだったですね。

それで釣りにハマってしまい、釣り行脚で全国を遡上するうちに中部山脈から奥羽山脈、白神山地、それから北海道と、いわば釣り上がつていったんです。登山を始めたのもその頃で、溪流釣りとセットでした。それが日本を回り始めるひとつの契機になりましたね。当時は、猫も連れて登つていました(笑)。(スモホで猫の写真を見せてもらつた)「こんなふうに山の中です、まだ目も開いていないような子猫がミヤマミヤマ



そもそもぼくが小学校時代に習っていた絵の先生がシュールアートの画家で、その先生の影響で仏教美術に目を開かれたり、シュールアートに目覚めたりしたんです。吉井英二という先生で、いまでも一科展の重鎮として活躍されています。ぼくの家は、じつじつわけか詩人や画家がよく遊びに来ていて、吉井先生も家に逗留していたんですよ。彼らが僕にとつての父親的存在みたいなところもあって、そういう面での影響というのは大きかったですよね。海外に目を向けていたというのも、ぼくとしてはごくあたりまえの感覚でしたが、おそらく吉井先生たちの影響だと思っています。

**吉田類さんは俳句も有名ですが、どこか生きさみしさを堪えるような風情があるのは、若山牧水の短歌の世界を思わせます。**

若山牧水の「幾山河越え去り行かば寂しさの終はなむ国ぞ今日も旅ゆく」ですね。彼は宮崎県日向市の生まれなんですが、ぼくは牧水が好きなので、じつは彼の生家を訪ねたことがあるんです。それでわかったことは、彼の生まれ故郷の風景というのが、じつにぼくの故郷の風景とよく似ているということなんです。ぼくは高知県の仁淀川のそばなんです。牧水も宮崎の川のそばで育ち、ぼくは6歳のとき、さきほどもお話したように海を見たんですが、彼も同じように6歳くらいで初めて海を見たと思うんですよ。どこか似ている風情があるというのは、そうかもしれないですね。彼もぼくもお酒

ないているのを門前仲町で拾つて、片時も離れないのでそれで山にも連れていくようになったんです。「からし」と名づけましてね。17年間、ずっと一緒でした。山に行くときは、背中に背負つザックの上に乗つて、ぼくが溪流に入るときはテントですっさと待っていました。絶対に逃げないんです。どうも彼は自分を猫だとは思つてなくて、人間のぼくのことを親と信じ込んでいるようでした。だから、死んだときは辛くてね。5年間ぐうい立ち直れなかつた。いま、事務所でも猫を2匹飼っていますけど、やっぱり「からし」のような存在とはちよつと違つたかもしれません。

そうそう、このあいだこんなヤマネを見つけたんです(手のひらで丸くしている小動物の写真を見せてもらつた)。ヤマネという名前くらいしか知らないと思つたんですけど、これは日本では天然記念物ですね。昔はユーラシア大陸にいたことがわかつているんですけども、絶滅していまは日本列島にしかないんじゃないかな。これが、くるくるつと丸くなって登山道に寝ていたというか、仮死状態になっていたんです。もっ少ししたらほかの登山者に踏まれてしまったかもしれないけど、その前にぼくが偶然見つけたんです。どうも動物との不思議な交わりというのがいっぱいありますね。

**ちゅーりっぷ通信の読者のために、吉田類さんがおすすめしたいことなどがあればぜひ教えてください。**

本当はお酒を飲むことをおすすめしたいところですが(笑)、そうもいかないか。でも、日本の飲酒

がとも好きだし(笑)。

ぼく自身は俳句をはじめたのは遅くて、30歳もなかばを過ぎてからですが、母親の影響で子ども頃から遊びで作るといふことはありました。生家は高知の山奥で、かえって土佐よりも松山が近いんですね。正岡子規を生んだ松山。久万高原というところを越えればすぐなんです。そういう地理的な位置関係もあって、俳句に親しむ下地はあったといえはいえるんですけどもね。若い頃に影響を受けているのは、なんといつてもシュールアート含めて全部西洋文化じゃないですか。だから俳句をやるつなんて思いもしなかった。日本の古典や俳句に目を向けるようになったのは、日本に戻つて自然を歩くようになってからです。溪流や山に親しむようになって、はじめて日本の古典や俳句が自分にも近いものなんだと気づかされました。



文化というのは海外からも高く評価されていて、新宿のゴールデン街とか横浜の野毛などが注目されているところとだけは言っておきましょう。

それから自然環境に目を向けるということですね。一歩街を出たら、こんなに手軽に自然に向き合える環境は日本以外にあまりないし、その魅力にもっと気がついてほしいですね。ぼくはいま、札幌と東京は多摩の方に住んでいるんですけども、近所を歩くだけでも昆虫などの生命力あふれる写真が撮れたりするんです。ですから、写真で自然を撮る、自然に向き合うというのでもいいんじゃないでしょうか。

自然に向き合つたつともちろん俳句を作るのもおすすめです。俳句の宇宙というものを自分に引き寄せると、感性がみずみずしく保たれると思います。俳句を作る意識というのは、生物学的な年齢などを離れたところで自由に活動するものですし、詠むのはむしろかいいことではあります。五七五のリズムに乗せて、あとは自由に遊ぶ。目の前にあるものを詠んで、じつのところは自分の心のなかを詠んでいるんですね。季語というものがありますから、その季語を入れて、あとはどんなに現代語を使つてもちゃんと俳句になります。

体の不自由な方もいろいろやるだろうけど、その不自由さのなかで見えるものごとや風景が貴重だとぼくは思います。たとえば、車椅子から見える「あなただけの世界」というものが必ず

あるし、それを俳句を通じて表現してぼくたちに教えていただきたいですね。



遠い思い出、なつかしい歌



サッチちゃん

幼い女の子のかわいい姿やしぐさまで伝わってくるような歌ですね。そういえば、近所にこんな女の子がいたなあと思い出されるような気がしてきます。

作詞 阪田寛夫 作曲 大中 恩

サッチちゃんはね  
サチコっていうんだ ほんとはね  
だけど ちっちゃいから  
じぶんのこと サッチちゃんって  
よぶんだよ  
おかしいな サッチちゃん



歌のこぼれ話

1959年(昭和34年)にNHKラジオで発表された曲です。歌われている「サッチちゃん」は、聴く人によってさまざまな少女が想像されていたはずですが、作詞した阪田寛夫氏は後年、歌のモデルは近所に住んでいた作家・阿川弘之の娘、阿川佐和子さんだったと明かしました。実際、阿川家は阪田寛夫の近所から引っ越してしまっただけで、歌詞の内容とも一致します。大人になった阿川佐和子さんには、たしかに「サッチちゃん」の面影が残っているような気がしますね。

JASRAC 出1709164-701

すこやか生活ワンポイントレッスン



日常を俳句で彩りませんか

今月号の吉田類さんのお話にもあったように、俳句は五七五のリズムに乗せて遊ぶだけ、と思えば気軽に始められそうですね。俳句づくりは初めてという方も、以前やっていたという方も、日記代わりに俳句を始めてみてはいかがでしょうか。

無

季であつてもいい、自由に作っていいのが俳句なのだといわれますが、やはり一定のルールがある方がかえって作りやすいかもしれません。そのルールにしたがって、作り方をご案内すると。

①季語を入れてみましょう。

俳句を作るとき、便利なのが「歳時記」や「季語辞典」といった本。ふだん何気なく使っている言葉が四季折々の季語としてまとめられていて、とても便利。自分の使いたい言葉が季語なのかどうかも確かめることができます。「運動会」といえば最近では春に行う学校も多いようですが、これは秋の季語。「菊」という言葉も秋の季語で、正岡子規に俳句を教わった夏目漱石には「こんな句もあります」。

「あるほどの菊投げ入れよ棺の中」。親交のあった女性が若くして亡くなった時に詠んだ追悼句ですが、漱石の悲しみが伝わってくるようにです。

②切れ字を使ってみましょう。現代の言葉で自由に詠んでいい俳句ですが、現代語ばかりだと、どうも



俳句らしい奥行きや余韻が出ないことがあります。そんなとき「や」「かな」「けり」といった切れ字を使ってみましょう。久保田万太郎には切れ字を使った有名な句「湯豆腐やいのちの果てのうすあかり」があります。最晩年の作ですが、その晩年の意識がじつに絶妙に湯豆腐に託されているようです。

③五七五の形式をかたく守りましょう。よほどのことがない限り、字余りの句を作らないようにします。手かせ足かせとなるようですが、ルールを引き立てることでしょう。あとは自由に詠むだけ。人にどういわれようとも一度作った句はあなたが生きた証しの一句。どんな著名人の名句にもまなむことのできる句。

介護と暮らしのアイデア箱



秋をもっとおいしく食べよう！  
秋のテーブルコーディネート  
収穫の秋、食欲の秋の到来です。今回は、食卓テーブルでも、ベッドテーブルでも気軽に秋をもっと美味しく楽しむコツをご紹介します。

秋

の色と言われたら、あなたは何色を思い浮かべますか？色づいた葉を連想して赤や黄色を思い浮かべるかも知れません。ぶどうの収穫の時期ですから、紫やワインレッドという方もいらっしゃるでしょう。すっかり定番化したイベント、ハロウィンのオレンジや茶色など暖色系もあるでしょうし、十六夜の月やスキを思い、黒と金色など和風でシックな色を選ぶ方もいますね。そのイメージを、一番簡単にテーブルへ表現するならランチョンマットがおススメです。食器を全部秋仕様にするよりも効果的ですし、テーブルクロスよりも小さくて使い



やすく、一枚用意するだけで一気に雰囲気が変わります。ランチョンマットはインテリアショップなどに行くとも目移りするほどたくさん種類が揃っています。でももっと安価に楽しむなら、頼りになるのは100円ショップ。布製のものだけでなく、汚れてもさっと洗えるポリプロピレンの商品もあるのでとても便利です。もしお気に入りの柄が見つからなければ、布屋さんで好きな布を購入して、サイズに切って端を袋縫いするか、布用の両面接着テープで貼つけるとあっという間にランチョンマットのできあがりです。さらに、インターネットができる環境でしたら、紙のランチョンマットを無料でダウンロードできるサイトを見てもいいかもしれません。使い捨てで使い、いろいろな柄を気軽に使い分けができるので、「ペーパーランチョンマット テンプレート」で検索してみてください。旬の素材とお好みのランチョンマットで秋らしい温かみのある食卓を作ってみましょう。

今月のクイズ



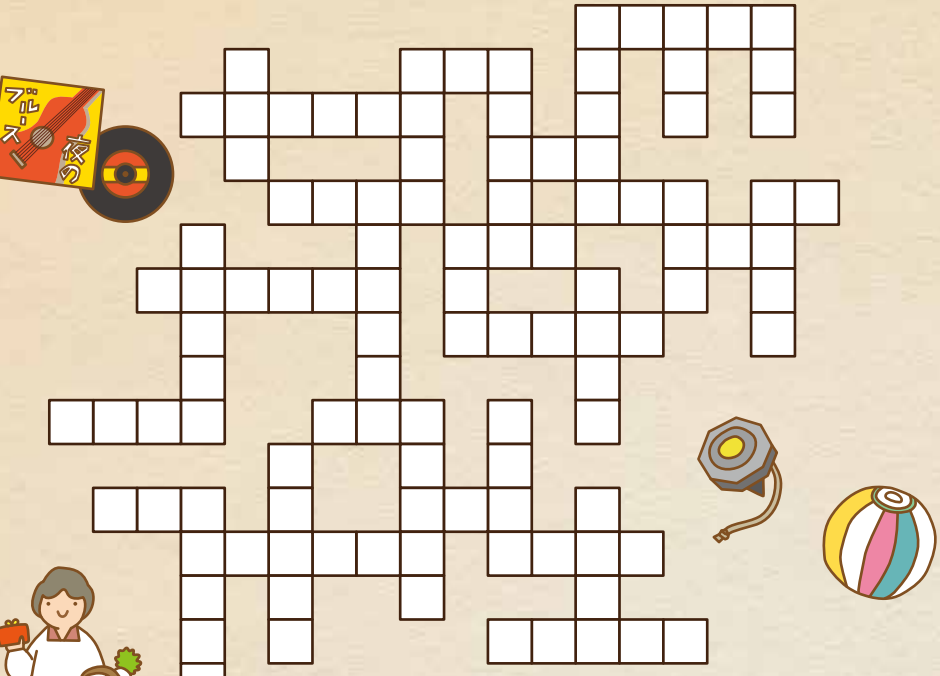
スケルトンパズル

昭和の風景



昔懐かしい昭和の暮らしの必需品たち。時代が変わってすっかり見かけなくなったものも多くあります。リストの言葉を使ってパズルを解いていくと、2つ使わない単語があります。昔を思い出しながら、探してみましょう！

昭和の言葉リスト



- 2文字
  - げた
- 3文字
  - あるみ
  - あんか
  - いずみ
  - おひつ
  - かまど
  - きせる
  - しんし
  - はたき
  - たらい
  - ひばち
  - ほうき
  - みしん
  - めんこ
  - らくだ
- 4文字
  - おうかん
  - げしゆく
  - せんとう
  - ちりとり
  - ばんがさ
  - べーごま
  - ほうろう
  - れこーど
  - わたいれ
- 5文字
  - おぎぐすり
  - かっぽうぎ
  - きやらめる
  - きりたんす
  - ちからづな
  - ちくおんき
  - ちやぶだい
  - ばなまぼう
  - ふらふーぷ
- 6文字
  - かみふうせん
  - かんかんぼう
  - とらんじすた
  - やきゅうばん

## 編集後記

インタビューを終えると、これから飲みにいきませんかと思いがけないお誘い。酒場詩人から、酒場に誘われるなんて夢のようです。案内された某ビール園では、ジョッキを重ねること幾杯か。お酒が進むほどに、介護や福祉について熱く思いを語ってくださいました。忘れられないひと言は「犠牲を強い文明というのは滅びるんですよ」という言葉。「人生を一生懸命生きてきて、年齢を重ねたら人は大事にされるべきなんです」。「それがもし我慢を強いられるとか、つらい思いをするとしたら、そういう文明のあり方は間違っている」と。吉田類さんの気持ちが伝わってきた酒場の一夜でした。

## お客様の声

平成29年7月号の感想

●今はあまり口になくなった「洋楽」という言葉を改めて思い出させてくれました。まさしく湯川れい子さんが運んできてくれた胸躍る音楽でした。エルビスファンとしてあの悲しみを湯川さんと共有していたのですね。(中区N様ご家族様)

●湯川さんが母と同年であまりの若さにビックリ。母に代わりましてますますのご活躍のエネルギーを送らせていただきます。(金沢区S様ご家族様)

●湯川さんの教えてくれた「あいうえお」覚えておきます。(保土ヶ谷区W様)

●「アイデア箱」にも似た例がありました。レースのカーテンは洗濯脱水後、干さずにそのままかけると涼しいです。(港北区S様ご家族様)

## クイズの答え

3文字

かまど

4文字

ばんがさ

パズルの全解答はインターネットでご覧いただけます。

## 皆さまからのお便りをお待ちしています。

編集部では、ご意見、ご感想、とりあげて欲しいテーマなど皆さまからのお便りをお待ちしています。お便りをくださった方の中から、**抽選で5名様に薄型ルーペをプレゼント**いたします。ふるってご応募ください。

〒220-0021 横浜市西区桜木町6丁目31番地 6階  
横浜市福祉サービス協会「ちゅーりっぷ通信」編集部



## 今月の協会ニュース

平成28年度

## 「新規お客様アンケート」報告

— 訪問介護編 —

アンケートにご協力ご協力いただきましてありがとうございます。

皆様には、ヘルパーの仕事ぶりや接遇面での多くの良い評価をいただきました。しかしご回答の中には少数ですが「もっと優しい言葉遣いで」「毎日同じヘルパーに来てほしい」などのご意見もございましたので介護事務所と連携しながらお話を伺うなどの対応をさせていただきます。

これからも日頃の仕事の姿勢を振り返り、お客様に安心と信頼をお届けすることを心掛けてサービスの向上に努めてまいります。

お客様相談室

町 亞聖氏 講演会

## 十年介護

〜車椅子の母と  
過ごした奇跡の時間



会場 横浜市磯子公会堂  
日時 9月14日(木) 14:00~16:00

お申し込み メール・FAX・往復ハガキのいずれかで  
①ご住所 ②お名前 ③電話番号  
④参加人数 を書いてお送りください。

## 介護者のための相談電話

## 介護に疲れたとき…ほっとライン

介護に疲れて行き詰まったり、不安になったりしたとき、ひとりで悩まないで、ほっとひと息ついてみませんか？

☎045-227-1718

## 「お客様相談室」をご利用ください

「お客様相談室」では、事業やサービスについてのご意見やご要望をお受けしています。まずはお気軽にお電話ください。

☎0120-701-782 FAX 045-227-1721

※受付は年末年始および祝祭日を除く月曜～金曜の8:45～12:00 / 13:00～17:15まで。ご相談の秘密は厳守いたします。

## 協会の理念

- お客様の満足
- 人を大切に共に育ちあう企業風土
- 公正で透明感のある企業倫理

社会福祉法人 横浜市福祉サービス協会

〒220-0021 横浜市西区桜木町6丁目31番地 6階

☎045-227-1700 FAX 045-227-1701

ホームページ <http://www.hama-wel.or.jp/>

町 亞聖氏講演会  
お申し込み先

R80

古紙ハルブ配合率80%再生紙を使用

